

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	日本語教育センター(国際連携機構)
大項目	0 理念・目的
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2011年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 日本語未習者を対象にしたプログラム案を策定する。	プログラム案の策定状況 評価基準： A→日本語未習者を対象にしたプログラム案を策定 B→評価基準なし C→評価基準なし D→未策定			B	A	A
2. 関学の留学生の実情に即した日本語教育プログラム案を策定する。	プログラム案の策定状況 評価基準： A→関学の留学生の実情に即した日本語教育プログラム案を策定 B→評価基準なし C→評価基準なし D→未策定			B	A	A
3. 各学部・センター・研究科との連携の方策案を作成する。	連携の方策案の作成状況 評価基準： A→各学部・センター・研究科との連携の方策案を作成する。 B→評価基準なし C→評価基準なし D→未策定			D	A	A

☆

2012年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
4. グローバル人材育成推進事業におけるSENDプログラムに対応する科目を創設する。	SENDプログラムに対応する科目の創設状況 評価基準： A→創設した。 B→創設の準備はできたが、まだ創設していない。 C→創設の見通しはあるが、まだ創設に時間がかかる。 D→検討していないため、創設の見通しが不明					A
	→					

☆

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 従来からある交換学生用のレベル1のプログラム(インテンシブ・レギュラーともに)の改修を含めて、新たにプレ1のプログラム(日本語学習コースプレ1・インテンシブは週6コマ、レギュラーは週4コマ)を構築し、2012年度秋学期から実施した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か プレ1レベルを設けたので、従来受け入れが難しかった完全な未習の学生を受け入れられるようになった。そのことにより、交換留学による受け入れ学生も若干増えた。日本語の選択科目の履修にはある程度の日本語能力が必要になるので、彼らのための選択科目を今後構築していく必要がある。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 日本語能力が中級以下の学生のための選択科目を設置するための検討を開始する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院学生用の科目としてあった「日本語口頭発表」「日本語論文作成」科目を春秋開講とし、それぞれ重複履修ができるようにして、より高度な日本語運用能力を身につけさせるプログラムに改編した。また従来あった学部の「ビジネス日本語」を充実させるために従来のA・Bに加えCを新たに開講し、大学院学生も履修できるプログラムとした。さらに、学部科目「日本語総合演習」についても、従来の半期科目ではなく、通年にわたって履修できるよう積み上げ科目としてA・Bとして開設した</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 研究に必要な日本語能力を伸ばさせたい学生には評判がよかったが、1クラスしか設定していないために、他の履修との兼ね合いで履修できない学生がいる。また、日本語科目は各研究科の修了要件単位ではないために、敢えて履修しようとする学生が少ない。学部科目の「日本語総合演習」はA・Bとしたことで、日本語運用能力、特に大学での授業に必要な高度な運用能力の伸長を図ることができた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学生たちの需要を正確に把握し、多くの学生が履修できるような開講形態と指導内容を検討していく。また、今後英語での科目の履修が困難な学生たちが増えていくと予想されるが、これらの学生の在留資格を満たすために科目の新設が必要になるので、様々なレベルの日本語学習者に応じた新設科目を検討、実施する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 国際学部との間で、留学生の日本語科目受け入れについての2014年度版の覚書を交わし、今まで受け入れていなかった日本語N1以上の学生(「日本語話者」として入学した学生)の受け入れを2014年4月から始めた。なお、2013年度版の覚書によって、2013年度は国際学部の英語話者(未習者から日本語N2レベルの学生)について受け入れ、日本語教育を実施した。この覚書は、本センターとは履修体系の異なる国際学部の学生に、本センター開設の科目体系の中で、遺漏なくしかし国際学部の履修体系に準拠した形で履修できるよう配慮したものである。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 交換プログラムで受け入れた国際学部の学生について、十分な教育が実施できた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 国際学部との話し合いの中で、2015年度以降、日本語話者として入学した学生は、他学部と同様の受け入れをし、英語話者として入学した学生については国際学部が日本語教育を実施することで合意がなされている。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標4	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできた 「日本語教育基礎」「日本語教育基礎演習」の2科目を創設し、「日本語教育基礎」は春学期、、秋学期ともに2クラス設置、また「日本語教育基礎演習」は秋学期に1クラス設置し、教育を開始した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か グローバル人材育成促進事業のSENDプログラムの一環としての科目であるが、広く日本語教育に関心のある学生の熱心な参加があり、非常に好評であった。ただし、学内的にこの科目の認知度が低く、当初設定したクラス数に達していない。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 当初予定のクラス数の開講を目指して、様々な機会(留学生week、日本語パートナーの講習、など)を捉えて、広報活動を行う。	☆
		その他	☆
			☆
備考			☆